

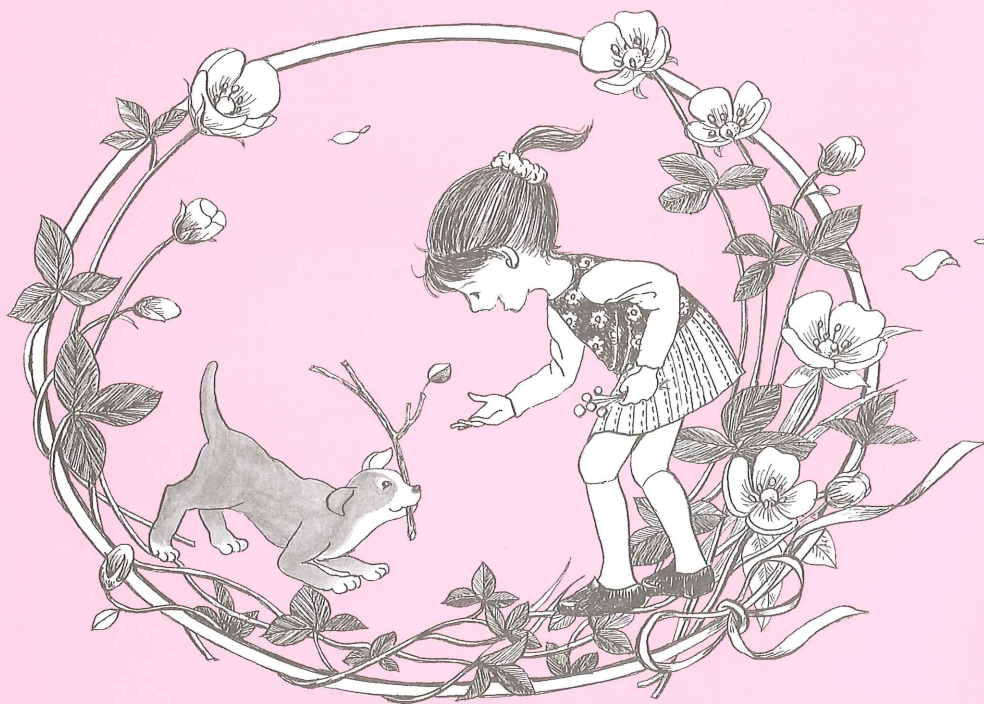
乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

特集

いま、倉橋と出会う4
「生活を生活で生活へ」

4
2010



新学期、これさえあれば安心!

幼稚園対策 実践の読み解きに最適!



環境図や評価の視点など、項目が充実!

改訂2版
わかりやすい 幼稚園
指導計画作成のすべて

柴崎正行/編著

平成21年実施の「幼稚園教育要領」に完全対応。
計画の書き方・教育課程や実践の理解を深めるためのポイントがわかる。

26×21cm 280ページ 定価2,415円(税込)

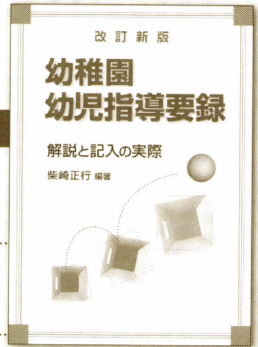
インデックス付きでわかりやすい!

改訂新版
幼稚園幼児指導要録
解説と記入の実際

柴崎正行/編著

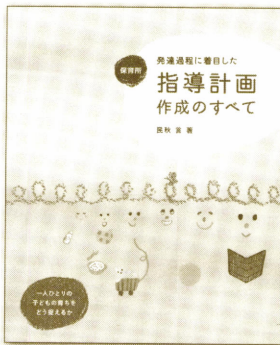
平成21年に改訂された「幼稚園幼児指導要録」の解説と
共に、記入する際のポイントをわかりやすく紹介。

26×19cm 152ページ 定価1,260円(税込)



36201

保育所対策 個々の発達過程に対応



年間計画から日案まで見通せる誌面構成!

発達過程に着目した 保育所
指導計画作成のすべて

民秋 言/著

発達過程に着目し、0~6歳までの育ちの流れが
一目瞭然! 見通しをもちながら指導計画の作成
ができる。

26×21cm 296ページ 定価2,415円(税込)

3つのパターンで記述を紹介!

保育所児童保育要録の書き方

民秋 言/著

一人ひとりの子どもの育ちを捉え、どう小学校へ伝えるか。
保育要録の記入のポイントがわかる。

26×19cm 96ページ 定価1,050円(税込)



36210

幼児の教育

第109巻 第4号

目次

● 巻頭言 ●

子どもたちの社会性と保育者の専門性 汐見稔幸

4

● 特集 ●

いま、倉橋と出会う 4 「生活を生活で生活へ」

8

「さながらの生活」から始めることが幼児教育の原点 上垣内伸子

9

◆ インタビュー ◆

「生活を生活で生活へ」 さながらの生活と教育 堀合文子

12

体験が積み重なる生活 青山昌子

20

新

● 園のくらしを育む 1 ●

幼児と自然 (1) —泥山に学ぶ— 秋田喜代美

24

● 絵本で子離れ (1) ●

「でも、こうなの」 松井るり子

28

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第109巻 第4号

● 保育の創意工夫 (4) ●

新年度、子どもを迎える園庭環境

前原 寛

34

● 発達心理学者の子育て奮戦記 (10) ●

赤ちゃん、お姉ちゃん、そしてお母さん

長田瑞恵

38

● 「幼児の教育」 ネット公開に寄せて (16) ●

時空を超えて

北野幸子

44

● ひととき第4回 ●

子どもたちの心に小さな種(まめ)を

まめの木プロジェクト

50

● 保育の現場から ●

保育の中の親支援

前野當子・谷本恭子

52

● お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (40) ●

幼保の連携に向けて

塩崎美穂

58

巻頭言

子どもたちの社会性と保育者の専門性

汐見稔幸

子どもの社会性はいつごろから育ってくるのだろうか。その発達は乳児期にはあまり期待されない——通常はそう思われているのではないか。しかし、本当にそうだろうか。一つの例を考えてみよう。ある保育園の〇歳児クラスのこと。そのクラスに日常的にっている看護師さんの話だ。

ベテランのA先生は、肝っ玉母さんタイプだ。赤ちゃんを抱いている時に呼び出されて、そっちに向かおうとする時に、誰かほかの赤ちゃんに足元で抱っこをせがまれても、絶対にその子のことを無視しない。もう一方の手でちょっとだけ抱いて、「ごめんね、先生ちょっと用事があるからね。後でね」などと言ってから行く、そんな先生だ。戻ってきたら、必ず約束どおり抱っこをする。

若いB先生はちょっと違う。同じような場面で足元で誰かに抱っこをせがまれても、いま、先生は手がふさがっているし、呼び出されているのだから、無理よ、という態度



で、無視しようとする。それでも抱っこをせがまれると、困った子ね、というようにあまり心を込めず、形だけ抱きあげる。そして、すぐおろして行ってしまう。悪気はないのだが、ていねいな対応という点で、A先生とは違いが見えてしまう。

その看護師さんは、この二人の違いをいつも興味深そうに観察している。そして、子どもはそうした保育士の姿勢、振る舞いをよく見ていて、保育士によって態度を変えるということを見出したという。子どもたちはA先生には普段から喜んで近づいていくし、抱かれていなくても、A先生を拠点にして、そこであれこれ探索活動をする。しかし、B先生のところには普段からあまり子どもたちは自ら近づかないし、B先生がいる時には活動もどこか遠慮がちに見える。そういうことが、よくわかるというのだ。まだ○歳児、一歳児だ。

私なりに考えると、こういうことになる。子どもが何かイタズラをしようとした時、「あら、何するのかしら？ おもしろいこと始めるのかな？」とその子の好奇心を肯定して興味深そうに見つめる保育者と、「あら、また何かするの？ 危ないわねえ。それに汚れたら困るから、やめてくれないかな」というまなざしでその子を見る保育者との違いを、子どもは動物的な勘で見抜くというのだ。何を見抜くかというと、保育者がその子に期待するものの違いだ。子どもたちはもうこの年齢で、保育者のまなざしやしぐさ、言葉かけなどの外に表れた、いわばインデックスの違いを通じて、その背後にある保育者の子どもへの期待という（形にはならない）心理の違いを見抜くというのだ。



これは、子どもたちのある種の社会力、社会性の表れではないだろうか。相手の行為を手掛かり（インデックス）に相手の期待を読み取り、それにふさわしく行動する。こうした行為力は、相当早くから発達するのではないか。

同じクラスが、担任が変わることによって見違えるように変わることがある。この時、何をきっかけに、どういうメカニズムでクラスの雰囲気が変わるのか、そもそもクラスの雰囲気と言われているものの実体は何か。こうしたことは、これまでどのように研究されてきただろうか。クラスの雰囲気とは、先生の子どもへの期待の（意識的、そして無意識的な）表出と、その意味を読み取った子ども自身の行動への自主規制の意識の集合である。

保育の専門性ということが最近の保育研究のメインテーマの一つになりつつあるが、いま述べたことは、専門性研究の重要なテーマとして位置付いている感じは正直言ってもあまりない。しかし、実際の保育を観察すると、保育者が中心になってつくり出す子どもへの期待の心理システムとしての雰囲気が、子どもたちの行動を規制する率は極めて高い。とすると、保育者の専門性の一つは、自らがどういう期待のシステムづくりを行っているかを自覚しているかどうか、そして、子どもたちの望ましい発達を促すような雰囲気をどうしたらつくることができているかを知っている、ということではなければならない、といえるだろう。

以前、話し合い保育を実践している、ある大規模な幼稚園で興味深い出来事があつ



た。雨の日で、全員、クラスの部屋かホールで遊んでいた。ホールには年長児が多く、クラスごとに固まって遊んでいた。隅っこで大型積み木を積み上げていたグループがいたが、それが崩れ、窓ガラスが大きな音を出して割れた。その様子を見ていたほかのクラスの子もたちの行動が、クラスごとに見事に違ったという。あるクラスの子は近づかないで、僕たち関係ないよなとひそかに言い合い、あるクラスは「やーちゃった、やっちゃった、○ちゃんがやっちゃった」とはやし立てた。別のクラスの子は近づいて「○○ちゃんがいけないんだ」と犯人探しをした。もう一つのクラスだけが「先生呼んできて。△ちゃん、こっちから下りないと危ないよ」と適切な対応をした。

後で調べると、日ごろの話し合いで「○○ちゃん、自分がいけないことわかった？ じゃみんなに謝って」などという態度で先生が接していたクラスは、ホールで犯人探しをしたし、先生が気に入ることを発言すると先生の目が輝き、気に入らないことを発言するとそれを顔つきで示してしまう先生のクラスは、僕たち関係ないよな、と様子見を決め込んだことなどがわかった。適切に対応したクラスのみ、先生はどんな発言をしようと同じように大切に扱い、最終的には自分たちで考えさせようとするような態度であった。

ビデオで撮るのもよい。自分の態度に表れている期待を何とか可視化して、自分の対応がつくり出している雰囲気を実感すること。これが、保育の専門性向上に何かしらつながるのではないかと思う。

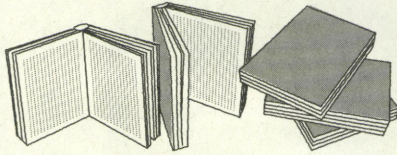
(白梅学園大学教授)



いま、倉橋と出会う4

倉橋惣三（一八八二—一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問いつつ機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

私はいつもよく、生活・生活・生活へ、という何だか呪文のようなことを言っています。が、この生活・生活・生活へという言葉には、その間に教育ということを寄せつけていないように聞えますが、もちろん目的の方からいえば、どこまでも教育でありますけれども、ただその教育としてもっている目的を、対象にはその生活のままをさせておいて、そこへもちかけていきたい心を呪文にし唱えているに外ならないのです。教育へ生活をもつてくるのはラクなことであります。それには然るべき教育仕組をこしらえておいて、それへ子供を入れればよいでしょうが、しかし、子供が真にそのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、それへ幼稚園を順応させていくことは、なかなか容易ではないかもしれない。しかしそれがほんとうではありますまいか。少なくとも幼稚園の真諦は、そこをめざさなくてはならないものと、私は固く信じているのであります。



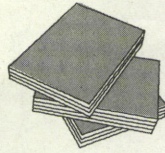
「さながらの生活」から始めることが

幼児教育の原点

上垣内伸子

一九三〇（昭和五）年、三度目の附属幼稚園主事（園長）となった四十八歳の倉橋は、若
いころよりあたたかためていた保育思想を、系統的な保育理論として発表していきます。翌六
年には『就学前の教育』、九年には彼の保育論の結晶とも言うべき『幼稚園保育法真諦』が
出版されます。戦後（昭和二十八年）、倉橋は「私の考えが、尚この枠の中を往來している」
として、第四編「誘導保育案」を削除し、『幼稚園真諦』として復刊させました。倉橋自身が
「何だか呪文のように」と語る「生活を生活で生活へ」とは、『幼稚園真諦』に記された彼の保
育思想を象徴的に表現した言葉であり、彼の保育思想の中心をなすものといえます。

「生活を生活で生活へ」を解題すれば、幼児の自然な生活、さながらの生活を大切にし
て、家庭との境目のない自然な形で幼稚園生活をスタートさせ（生活を）、保育者が配慮
し用意した設備のもとで、自由感をもって十分に生活を生活として味わうことで充実感を
得（生活で）、さらに生活興味が利那的ではなく、系統的なものとなっていくことにより
生活自体の発展と深まりが得られ、子ども自身が自分の成長を実感していくような生活へ
と導かれていく（生活へ）、とでも表すことができるでしょうか。



『幼稚園真諦』の第一編の最後（p. 61）に、保育法の道筋として、

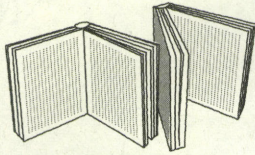
幼児のさながらの生活——自由・設備——自己充実——充実指導——誘導——教導

と記されています。幼児一人ひとりの自発性に基づく「さながらの生活」から始まり、

「幼児の生活を十分生活らしさにおいて害わないためには、幼稚園生活の形態に、自由の要素をできるだけ多くもたせ」、「幼児の生活が、その自己充実力を十分発揮し得る設備」

と、「子供に生活の自由が十分許されているという幼稚園全体の態度」の中で、幼児自らが自由感をもって十分に遊ぶことによって自己充実していく、さらに「子供が自分の力で充実したくても、自分だけでそれが出来ないでいるところ」を「子供の内に入って子供のしている自己充実を内から指導して」いき、「子供の興味に即した主題をもって、子供たちの生活を誘導し」生活に系統を与えていくことで生活興味をより深いものへと変化させ、そして最後に「もう一つこれを付け加えてやりたい」ということを教導するという保育法です。倉橋は、「幼稚園はどこまでいっても、幼児の生活の生活たる本質をこわさないで、教育していくところに、その方法の真諦が存する」と述べています（『幼稚園真諦』 p. 30～50参照）。

幼児が「さながらの生活」を幼稚園で十分に展開し遊ぶことで自己充実し、より系統的な生活興味へと誘導されることにより、つまり、幼稚園で保育者の細やかな心遣いと環境のもとで自己発揮して一日（もしくは数日）を過ごしたならば、始めと終わりでは、その子どもの「生活」の質は明らかに変わっていることでしょう。「生活を生活で生活へ」と



いう時、三つの「生活」の質の違いに着目しておきたいものです。

このように倉橋は、保育を考える際に、何よりもまず、幼児のさながらの生活を尊重した人物でした。幼児の自発的の生活の尊重から教育が始まるという発想や「生活」へのこだわりは、東京女子高等師範学校に着任し、幼児教育研究者としてのスタートをきったごく初期から、一貫してもち続けていたものです。

彼の初めての保育論ともいえる「幼児教育の特色」（大正四年）では、幼児の自発的の生活は、「形が自発的であるということ以外に、充実した内容を有して」おり、「自発的の生活の内容を尊重し、それを利用して積極的に幼児を教育して行く」ことが重要と述べ、「幼児教育の第一義」（大正五年）では、「幼児教育の第一義は幼児生活の価値を知ることである」と主張しています（倉橋惣三文庫6『幼稚園雑草（下）』フレーベル館 参照）。「就学前の教育」（昭和六年）では、就学前教育法の特性として「生活本位」（生活としての実質を離れない、生活としての自然を失わせない）をあげ、さらに「教育者自身の生活による誘導、生活性そのものによる生活性の教育である（生活による誘発）」と、保育者自身の生活性の重要性も指摘しています（『倉橋惣三選集第三卷』フレーベル館 参照）。

倉橋の「さながらの生活の尊重」という考えは、現幼稚園教育要領にも、「幼児期にふさわしい生活の展開」（第一章総則1幼稚園教育の基本）という表現となつて生き続けます。「生活を生活で生活へ」とは、いまも変わらぬ保育課題なのではないでしょうか。

（十文字学園女子大学教授）



「生活を生活で生活へ」

さ・な・が・ら・の・生・活・と・教・育

語り手 堀合 文子(H)
聞き手 佐治由美子(S)

● 倉橋惣三の教え子として

今回のインタビューは、倉橋先生の教えを受け、幼稚園で六十年を超える実践を続けてこられた堀合文子^様先生に、倉橋の思い出を語っていただくという企画です。聞き手の佐治は、三十年ぶりの再会でしたが、八十八歳になられた堀合先生は、以前の印象とお変わりなく、そのしゃんと伸びた背筋と柔らかい物腰、そして、にこやかな笑顔は当時のままでした。

S 先生は、女高師（東京女子高等師範学校、現お茶の水女子大学）を一九三九（昭和十四）年三月にご卒業ということですが、保育実習科で倉橋先生の講義をお受けになられたのですよね。

H ええ。でも、入学は一九三八（昭和十三）年四月ですから、一年間だけ。（修業年数が）二年になったのは、戦後のことじゃないかしら？ その時、倉橋先生が講義をなさったのは、ほんのわずかですよ。ほとんどが休講でしたから……。お話をうかがったのは、夏の講習とかでした。

そうおっしゃって、堀合先生は一冊のノートを取り出し見せてくださいました。それは、達筆でつづられた倉橋惣三講義録の堀合版？ でした。戦後、

幼稚園保母の再教育（注）のために行われた認定講習の会場で、園長としてではなく講師としての倉橋から保育を学び、その時に書き留めたノートを、堀合先生はいまでも大切に手元に置かれている様子でした。

H 講義は、黒板の前を行ったり来たりなさって、「遊びはね……」って、遊びのことを一時間。詩みたいな言葉でぱっぱとおっしゃって、それで一時間過ぎちゃう感じでしたね。でも、それを受けたのは数回で、ほかは休講。戦争も戦争でしたし、先生はいろんな点でお忙しかったのでしよう。板書しながらの講義ではなくって、短い言葉で語っていかれる授業。受けている側は、あははと笑っているうちに授業が終わっちゃった、そういうことをよく覚えてます。そのころは、お講義というふうにはとらずに、私たちが集中できるようにお話ししてください

ているというように感じていました。なので、ノートは後でまとめたものかもしれません……。

倉橋の教え子と称されてきた堀合先生が女高師で倉橋の教えを受けたのはたった一年間であつたこと、そして、その一年間の授業も休講が多く、ほんの数回しか講義を聴くことはできなかったというお話をうかがい、私は驚きを禁じ得ませんでした。そこで、女高師の附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）に奉職されてからの八年間が、倉橋の附属幼稚園主事（園長）時代と重なっていることから、園長としての倉橋を語っていただくことにしました。

H いまの園長先生のように、われわれと話をなさるような立場ではなかった。主事室に座っていらっしゃることはわかっていましたが、お話をするようなことではなかったのです。ごあいさつはしますけれどね。

S（遊戯室前で子どもたちの遊び相手をしている倉橋の写真を見せながら）たまにお子さんと遊ばれ

ることはおありだったのですよね。

H お子さんと遊ばれることはありました。だからといって、われわれがおそばに行くということはなかった。それぞれ自分のクラスの子どものことがありますでしょう……。ただ、今日はいらして、つてそんな感じでしたな。

堀合先生は、確かに長い期間を倉橋のもとで過ごされたのですが、実際には講義を聴かれることも少なく、仕事の場でも直に教えを受けるようなことはほとんどなかったとのこと。この点は、昭和初期の女高師の附属幼稚園保育が倉橋と共同研究を行ったその様子^{注3}とは大きく異なっています。

堀合先生が倉橋主事のもとで附属幼稚園に務められたのは昭和十六年からの八年間ですから、大戦前後の最も厳しい社会状況の中での保育を、まさに命がけでひたすらに守る日々であったと思われまます。

また当時、倉橋は、戦局が悪化する中であって自由主義者として政府から厳しい目を向けられながら、

文部省（現文部科学省）に何度も足を運んで、幼稚園存続のために力を尽くしました。

そして戦後は、教育刷新委員会のメンバーとなって

新しい教育制度の樹立に貢献し、さらに女高師が新制大学に移行する際には学部組織問題に真つ向から取り組むなど、多忙を極める日々を過ごしていました。そのようなことを考え合わせると、この時期は、倉橋にとっても、保育について幼稚園で語り合うような穏やかな時代ではなかったことが察せられます。

その中で堀合先生は、コツコツと保育実践を積み上げながら、疑問を感じると講義録を開いたり倉橋の著書を繙^{ひもと}いたりして、まさに「考えつつ行いつつ、行いつつ考えつつ^{注4}」の日々を過ごしておられたのでしよう。



▲聞き手 佐治由美子



▲語り手 堀合文子先生

●生活を生活で生活へ

S 倉橋先生は、子どもの生活についてはその自然な姿を第一に、というお考えでいらっしやいました。堀合先生は、実践の中でそのことをどのように考えていかれましたか。

H (旧女高師の) 保育実習科を出た方が方々の幼稚園に出ていってくださったように、児童学科(お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科発達臨床心理学

講座の前身)を出た方が同じように幼稚園に行ってくれた。その人たちは、こちらからいろいろ言わないで子どもの姿のまま、という「生活を生活で生活へ」をやってくれた。で

も、そのころといまとは、違ってきてしまっている。代々受け継いだ人たちが、自分でそれを理解してやっていくということができなかったのでしょうか。というより、難しくできなかったのかもしれないですね。

S そのころといまの違いとは？

H 倉橋先生のお考えは保育実習科、児童学科あたりまでは伝わった。でも、その次の代に伝わっていない。子どもの生活ということのところが違うのでしよう。実際にやるには、「生活を生活で生活へ」はかなり難しい。お子さんの活動の様子は、表向き違うようには見えない。でも、違う。もうちょっと教育が入っているんです。ただ遊びが大事、遊びを中心に、お子さんの気持ちを尊重して、と言っているだけではだめで、それが実際にどうやっていくことなのか、そのところが抜けているように思います。

S 伝え方も難しいように思いますが……。

H 正しいものを伝えていっていただきたいです。ちよつと見ると、遊びを中心にしてお子さんを尊重しているようですが、ただ一緒に遊んでいるだけで教育をしていないところが多い。倉橋先生のお考えは、教育をするのだけれど、そのことは表には出さないで、まず子どもが生活するようにさせて、その中で教育する、そういうことです。それは、すごく勉強しなければわからないでしょうね。

S 生活で生活へ、というところが特に難しいですね。

H そう、意外と先生の側にとっては厳しいということなんです。先生がびつとして、頭のとっぺんから足の神経まで集中していなければできない。そこに先生がいなくても、子どもには先生が「見えて」いなきやいけない。先生からも子どもからお互いに「見えて」いる、そういう感じが大事です。子どもの中に入ったら、三十人なら三十人をただこぼさないで見ればいい、ということではなくて、こちら

が自分っていうものを変えていかなければいけない。こちらが（子ども同士の関係の中で起こっていることも）感じ取る、その感じ方を厳しくしていくこと。そのあたりを先生は、一生懸命努力しなければできていかないでしょう。

堀合先生は、「生活を生活で生活へ」という倉橋の保育論を実践していくことは難しいとしながらも、後世に伝えていきたいという願いを強くおもちのようでした。まず子どもの生活を中心に置くこの理論は、現代の保育にどのように活かしていくことができるでしょうか。私たちはいま、堀合先生から大きな課題を受け取りつつあるように感じられました。

倉橋は、この理論を「子供が真にそのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、それへ幼稚園を順応させていくこと^{注5}」だと説明していますが、現代社会を生きる私たちは、子どものさながらで生きて動く生活をどこまで保障できているでしょうか。また子どもたちも、あるがまま

の自分を生きようとする強さをどこまでもち合わせているでしょうか。子どもたち一人ひとりが安心して自分自身を表現する生活の実現から、現代の保育は取り組む必要があるようにも思われます。

そのような生活の土台があれば、子どもへの教育に先んじて、子どもが「そのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにして」おく倉橋の保育が成り立つのかもしれない。まず子どもの生活が先にあり、その中で教育が行われることを、堀合先生もお話の中で強調されました。

この、さながらの生活を成り立たせている保育者の心とは、いったいどのようなものなのでしょう。それを倉橋は、幼児の自己充実への「信頼」であるとしています。またその「信頼」は、やがて「育つものに対する信仰」という言葉に語り直され、昇華されていきます。

「幼児の生活をさながらにしておくのは、(中略) 幼児自身の自己充実を信頼してのことです。」^{注6)}

「教育は育つものに対する信仰である。」^{注7)}

現代を生きる私たちが子どもと共にある時に、子どもの自己充実に信頼していると、どこまで言い切ることができるでしょうか。しかし、子どもたちが大人に信頼を寄せ、また大人からそれを得たいと思う気持ちは、昔もいまも変わらず子どもの中にあることでしょう。日々の小さな出来事の繰り返しの中で、子どもたちはこの信頼を支えに、自らの生を現在から未来へと切り開く生活をしています。大人が他者との間で育んでいくべき信頼が、子どもとの生活の中にもすでに同時進行としてあることを、保育者である私たちは自覚していたいものだと思います。

この子どもの力への信頼が確固たるものであれば、子どもに与えていきたい教育の心は、より自然なものとして子どもに受け取られていくでしょう。そのようなありのままの、そして当たり前の子どもと大人の生活を、倉橋は「生活を生活で生活へ」という短い言葉で唱えていたのではないのでしょうか。

●生活による誘導

私は三十年前に、堀合先生が担任をされていたお茶の水女子大学附属幼稚園の山の組（五歳児クラス）で、二週間の教育実習を受けました。今回のインタビューを通して、あれは倉橋の理論を具体的に学ばせていただいた体験だったのではないかと再確認する思いに至ったので、ここで取り上げてみます。

ある秋の日、園庭でひと遊びした後、部屋の様子を見ようと外靴を脱いでいた私の耳に、堀合先生が弾かれるピアノの音が飛び込んできました。私はその音に惹きつけられ室内に入りましたが、特別な活動が展開している様子ではありません。私はもったいない！と思いました。思うが早いか私の身体は動き出し、スキップを始めました。が、動き出した直後に、子どもに先んじて動いていることに気づいた私は、ピアノを弾いている先生のほうを振り返りました。すると、先生はニコニコとはほ笑んでい

らっしゃいました。しかも、私の動きを見ながらピアノを弾いてくださっていました。私もピアノに合わせるように続けていると、後についてスキップを始める子どもたちが現れました。そして、みんなで輪になりぐるぐる回る活動へと展開していきました。

この小さなエピソードは、いままさに大切なことを教えてくれます。私はピアノの音に身体の動きを引き出されたのです。子どもに先だつて動いてしまつたその配慮のなさを悔いていた私に気づかれた先生は、「真つ先に動いてくれたことがよかったのだけれど、それはどういうことだったのかしら？」と保育後に聞いてくださいました。私は「先生のピアノに誘われたように思いました」と答えたことを、いまでもはつきりと覚えています。このピアノの音は、園生活に子どものような喜びを見出していた私にとって、誘導する力をもっていたのだと思います。この誘導について倉橋は、次のように述べています。「幼児の自発性をそこなわざらんがために、環境を

もって誘導することを必要とした。その環境は物を主としていたのであるが、それと同じ性質の位置に人が立つとき、それは生活による誘発となる。教育者自身の生活による誘導である^注」

堀合先生のピアノによって私は誘導され、その音と私の動きが調和して一種のリズム空間が生まれていたとしたら、そのリズムは子どもたちを惹きつけずにはいなかったのかもしれない。この時、リズムを楽しんで動けるようにピアノを弾いてくださったことが、私を「生活による誘導」へと導くきっかけになったように思います。堀合先生がご自身の実践を通して倉橋保育の誘導を直接に伝えてくださったに違いないと、いまの私は認識しています。

この「生活による誘導」こそ、倉橋が子ども自身の発性を第一として考案した幼稚園教育ならではの教育の一つのあり方であり、また誘導保育の原点ともいえる倉橋の思想そのものでもあることを、改めて熟考してみたいと思います。

堀合 文子（前十文字幼稚園主事）

佐治由美子（お茶の水女子大学幼保プロジェクト）

記録・今井麻美（お茶の水女子大学大学院生）

注

- 1 経歴については、立川多恵子著「堀合先生に学ぶ（5）」『幼児の教育』第九十二巻第八号に詳しい。
- 2 敗戦により教育制度が改革され、一九四七年の学校教育法は幼稚園を学校の一種と規定した。そのため幼稚園保母はこの後幼稚園教諭と呼ばれるようになった。
- 3 この共同研究については、立浪澄子著「倉橋惣三と女高師附属幼稚園保母たちの実践研究の歩み」『幼児の教育』第一〇八巻第十二号に詳しい。
- 4 倉橋惣三著『幼稚園保育法真諦』東洋図書一九三四年 P. 4（倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』フレール館 二〇〇八年 P. 5）
- 5 倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』P. 24
- 6 倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』P. 31
- 7 倉橋惣三文庫3『育ての心（上）』フレール館 二〇〇八年 P. 10
- 8 倉橋惣三選集3『就学前の教育』フレール館 一九七五年 P. 435

体験が積み重なる生活

青山昌子

子どもたちと一緒に進級した昨年の春。年長の担任として「どんな楽しいことができるかな」と、私も子どもたちと同じくらい期待に胸を膨らませていたころのことです。PTA活動の一環として、保護者の方が園庭に実った夏みかんを使ってマーメイドを作ってくれました。その様子を興味深そうに見ていた子どもたちを誘って近所のお店にパンを買いに行き、翌日のおやつにいただくことにしました。帰りの集まりで「せっかくの機会だから、レストランみたいにしようと思うのだけれど、やってみたい

人はエプロンを持ってきてね」と、伝えておきました。次の日の朝。やる気まんまんで登園したたつやとえりをはじめ、エプロンを持参した子どもたちはレストランとなる遊戯室にテーブルや椅子をせっせと運んでいきました。そして、こうたは当然のように花を飾り、えりはテーブルの上で手を広げ「こういうの（誕生会で使うクロスのこと）を出して」と言います。また、しょうたは花が足りないことに気づき「僕が持ってきてあげようか」と庭に出て、白い



小さな花を摘んで戻ってきました。

レストラン会場が整ったところで、いよいよ配膳です。エプロンと帽子を身につけて準備ができたと思ったら、「マスクはいいの？ 手の消毒は？」と子どもたちから指摘がありました。そこで養護教諭に頼み、手の消毒をしてもらうことになりました。早くやりたい気持ちを抱えながらも、こうやって

いねいに身じたくを整えていきながら「楽しみだね」「早くやりたいね」とうれしそうにしている姿が印象的でした。

そして、お皿の上にパンを並べる人、パンの上に

マーマレードを載せる人、「こちらへどうぞ」とお客様を案内する人……。いつの間にか役割を分担して、レストランが開店しました。マーマレードを載せていたたつやとしゆきは配膳台に並んだ皿を見て「これは少ないよ」と、どのパンにもマーマレードがたくさん載るように気を配っていました。すると、配膳をしていたあいこが「メグちゃん、マーマレードきらいなんだって」と困って訴えてきました。そこで、たくさん載せることに一生懸命だったたつやたちに「メグちゃんはマーマレード、苦手なんだって。ほんの少しの特別なやつ、作ってくれないかな」と頼みました。すると「いいよ」と、むしろリクエストがあったことをうれしそうに、ほんのちよつとだけマーマレードをつけたものを用意してくれました。この後も、何人かのお客さんが「ちよつとがいい」と申し出てきましたが、たつやたちはそのたびに「はい。特別、いっちょ

うー」とうれしそうに作っていました。

年長児全員と教師たち、そしてマーマレードを作ってくださった保護者の方が食べ終わった後、レストランの子どもたちもいただきました。「おなかすいちゃったよ」と言いながらたっぶりのマーマレードをつけたり、「おいしいねえ」と満足そうな笑顔で食べたりしている姿からは、自分たちの手でレストランをやつてのけたという達成感と喜びが感じられました。お客さんとしてきてくれた友達や先生、保護者の方が喜んでくれたこと、それが何よりうれしかったのでしょう。クロスや花瓶の片づけまでしっかりやつて、レストランは閉店しました。

体験が積み重なって自信になる

朝からやる気でしたえりやたつやだけでなく、こなたやしようたも準備を進めていくうちに自分なりの考えをもつて工夫しようと動き出しました。年中

のころから毎月の誕生会にはクロスを敷いたり、花を飾ったりしておやつをいただいたてきた経験がある子どもたちですから、レストランにも使えるのではないかと考えたようです。また、身じたくを整えていくうちに手指の消毒をしようと思いついたことも、それまでの調理活動の経験から必要だと思つたのでしよう。役割を分担して配膳や片づけに取り組んだり、かしこまって「こちらへどうぞ」とお店の人のように振る舞つたりしているのも、パンやさんごっこで遊んでいた年中の時の様子と同じだなあと感じていました。

この日、子どもたちがとても楽しそうに取り組んでいたのは、それまでの経験を踏まえて自分たちでできることを進めていこうとしていたからだと思えます。年長になり、園生活で困ることはほとんどありません。自分でできることは自分で、さらに余裕があればみんなのために。そんな気持ちの余裕が出

てきたころだったせい、自分のやったことで周囲の人が喜んでくれるということがうれしかったのでしよう。そして、お客さんだった子どもたちも、「おいしかった」「もつと食べたかった」と満足そうでした。この日の帰りの集まりの中で「こちらへどうぞという言葉がよかった」「お皿の置き方がいねいだった」という感想を言ってくれた子がいました。お客さんとして参加していた子どもたちが友達のような言葉を表現できたことも、私にはうれしい出来事でした。


体験をその先の生活へ

教育要領の改訂以後、幼稚園生活における体験の豊かさを保障することや、一つひとつの体験が相互に結びつくようにすることの大切さがあちらこちらで指摘されています。今回、改めて倉橋の文章を読み返し、私は「ああ、このことだったのか」と思い

ました。それこそ倉橋の言ったように、呪文のごとく覚えていただけの「生活を生活で生活へ」という言葉の意味が、子どもたちの体験が積み重なっていろいろな生活としてイメージできたからです。

ママレードレストランを作りあげていった子どもたちは、「こういうふうになりたい」と自ら望んで工夫しようとしていました。そして、その体験は周囲の人に喜ばれたこともあり、充実した体験になったと思います。このような体験が毎日どこかで起きているように、そして、その一つひとつが次の生活へと活かされていくように環境を整えていくことが大切なのでしょう。そのために、保育者である私も子どもたちと一緒に生活を豊かにすることを目指し、生活の中で体験したことをその先の生活へと活かせるように、意識して過ごしていきたいと思っています。

(静岡大学教育学部附属幼稚園)



園のくらしを育む 1

幼児と自然(1) — 泥山に学ぶ —

秋田喜代美


1 はじめに — 分ける文化と育てる文化 —

本連載では、「園のくらし」をさまざまな観点から、私が出合ってきた事例をもとに書かせていただきたいと思います。長田弘さんは『読書からはじまる』（NHKライブラリー 二〇〇六年）という著書の中で、「分ける文化と育てる文化」という言葉で現代の生活に対する警鐘を発しています。全国どこでもコンビニエンスストアで同じ物が手に入り、メガヒットといわれるCDや本が広く誰にでも分かちもたれる時代です。小学校以上の教育においても基礎基本の徹底ということ、誰もが国民教養としてもつべき知識や技能が等しく分かちもたれることが求められ、その獲得が学力テストで測定される時代になってきました。これは便利で効率的であり、かつ限られた経済投資の中で効果的な社会をつくり出すために不可欠な近代産業主義社会の仕組みです。

しかしもう一方で、地域に根ざし、手づくりの手仕事で熟成させ、人の確かな絆の中で育てていくローカルな文化があります。それは時間をかけ、地域のアイデンティティと誇りをつくり出し、ここに生きる者としての自覚をもった市民性を生み出していきます。時には不便さの中に対話が生まれることでゆるぎない智慧が育てられていくのです。私は幼稚園や保育所において子どもたちが経験するくらしは、分けることの重視ではなく、育てる文化の場であってほしい、豊かなくらしは簡便さではなく、心や手をかけ質を高めていくていねいな保育の中で初めて育てられるものだと思います。それはそこに共に暮らす保育者、子ども、保護者たちによって生み出され大事に育てられていく文化です。子どもに何が身についたか、どのような形式で評価するのかと結果へと急ぐ語りではなく、子どものくらしに常に立ち戻り、園の風土と文化を共に育て語り合っていきたいという思いから、この連載タイトルとさせていただきました。それは倉橋惣三の「生活を生活で生活へ」の思想へとつながる、日本の保育のこれからの歩みの方向ではないかと思っています。

2 保育の場としての泥山

東京大学で毎月行っている保育者や保育研究者の先生方との研究会も、この10年間で80回を超えました。今月は、成宮正哲先生（神奈川県／しらかば幼稚園）の泥山のDVD事例を視聴しながらみんなで語り合いました。五歳の男の子たちは、掘ったり水を流したりと、尽きることなく何か月も遊び続けています。興味深いのは、この五歳児が卒園して翌



年になると、入園直後の三歳児がこの泥山の魅力に引かれ、この場をわが物としていく姿でした。幼稚園の決まり事を学ぶ前に、子どもたちはおもしろいものに引き付けられます。そして裸足になっていきます。直感的に魅力的なのです。土や砂、水は本来的に子ども遊び用にデザインされたものではありません。お子様向けにかわいいものをといて発想で機能を絞り込んで作られた玩具は、子どもの心を束の間とらえることはあっても、人間としての複雑な能力を備えた子どもの心の奥に長く入り込むことはありません。

大地を形成する自然物の複雑さは、天候や季節、土の中に生きるさまざまな虫や植物などの生命、さまざまな石や枯れ木などとの出会いによって、人間の本来の知的喜びを、身体感覚を通して呼び覚ましてくれます。身を置く場と操作の対象の一体化によって、解放感と挑戦があり、場に浸り込み、身をゆだねる遊びの真髄がもたらされます。泥山遊びや泥団子作りもまたその一部ですが、場も物も水や太陽や道具により変化をもたらしてくれます。

砂場は平地であるので、子どもたちは思い思いの向きでかかわることができます。しかし、泥山の斜面は子どもたちの姿勢を物理的に同じ方向に向けさせ、登れない子には自然に手が差し伸べられることで助け助けられ、登りきった満足感や降りるスリルが一体感を生み出します。水を流したり掘ったりすることで、土の硬さや山の傾斜度が常に変化します。これは滑り台やセメントで固められた遊び場にはない醍醐味です。

子どもたちが泥山の泥を掘り始める姿は、農耕や労働の始まりを思わせます。プラス

チツクのシャベルと小さなスコップなのでなかなか掘れません。大きな鉄のスコップを出したほうがよかったのではという意見が出されました。その意見が契機になって交わされたのは、いろいろな道具を使いながら、どの道具が便利であるかを子どもたち自身で見出ししていくことこそが大事という議論でした。泥山に水を運ぶのにも、子どもが使う物は最初は小さなカップからビンへとしだいに変化していきます。ある園では4リットルのポリタンクを泥山の脇に準備したそうです。水の重さの実感、一人で運べない時の助け合いなどが、一つの道具を通して生まれていきます。子どもの年齢に適した物だけを準備することが配慮ある環境なのだろうか、改めて考えさせられた時でした。

土や砂、水という自然物、山や穴という地面の起伏が子どもにもたらずもの、シンプルなほど複雑な遊びを生み出すこと、これは園のくらしで保障しなければ、現在の家庭生活では得られない経験です。ちなみに、この泥山は大きな山ではないのです。ちよつとした空間に、この数年間若い保育者の成宮さんが黙々と作ってこられた工夫です。ある都心の園長が言われました。「うちでも、限られた空間でも、土を入れたら子どもの目線から見る大きな変化が起こってきました」「穴や山づくりという起伏を考えたい」「園の人工芝は変えられないから、何ができるかいろいろ遊具でできる工夫と智恵を絞ってみたい」。

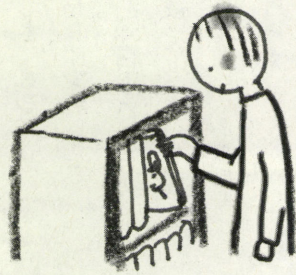
所与の環境から子どもの経験をいかに豊かな場にしていくのか、この絶え間ない心の刷新が明日の保育への力を保育者と子どもに与えてくれるのではないのでしょうか。

(東京大学大学院教授)

絵本で子離れ(1)

「でも、じじなの」

松井るり子



●絵本でものごとを考える

ある日、気がついたら、私の子育て時間が終わってしまいました。「日付が変わると魔法は消えるからね」と教えられていたシンデレラは、時計の鐘の音と共に、ささーっとお城を去ったので、魔法の解けた姿を衆目から隠して自分を守ることができて、よかったですねと思います。私の母親時間は「末っ子の高校卒業まで」と、一応タイマーのセットはしていた

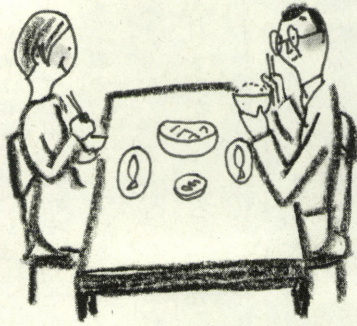
のですが、家を出た子がまた戻ってくれるなど、うれしいフエイントに油断するうちにさらに時が流れ、ハッと気づくと、じじばば二人暮らしの未来が、荒野のように広がっているのです。

夫との二人暮らしは、予想以上に陽気で気楽で、悪くありません。椅子五つが二つに減った食卓はやけに広いですが、これとて残り回数はもう決められていて、いずれどちらか一人のごはんになります。

二人のごはん回数は、今日一回使ったら、一回分が

確かに減ったのです。

夫もいけれど、私が「この人の痛みを私にください」と本気で祈れるのは、自分が産んだ三人の子だけです。それは夫も同じでしょう。お互いさまで。子どもは小さくてよし、大きくてよし、幾つになってもかわいくて、この溺愛を改める気は、全くありません。溺愛しているからこそ、彼らの行く手を阻まぬよう、細心の注意を払っています。



繊細に暮らす

最も有効な方法は、「考えること」ではないかと思えます。私はそのために、相変わず絵本や物語を使っています。

●身を捨てる女神への憧れ

子どものころ「大鍋にお湯を沸かし始めてから、畑に行く」という手順でゆでてもらった、とりたてのとうもろこしが、夢のようにおいしかったです。虫食いだらけの、虫の「残しもの」なのですが、味に関して虫の「お墨付き」でもあるわけで、ちょっと気持ち悪いけれど、気持ち悪いところこそがおいしさにつながっているということを、当時から知っていました。自分でごはんを作るようになって、台所で魚の血や内臓やごみや排水溝に毎日触るようになってからは、ますますそう思います。

アメリカインディアンの民話『とうもろこしおばあさん』（秋野和子再話 秋野亥左 画 福音館書店 一九八二年 品切れ中）は、とうもろこしのいわれを語ります。インディアンが野牛と芋を食べて生きていた昔、長い白髪のおばあさんが、一夜の宿

を頼んでは断られていました。一人の若者が、やつとテントに招き入れてくれた翌日、おばあさんはお礼においしいパンを焼きました。みんな、喜んで食べました。目新しいその材料は、とうもろこしだと告げますが、どこで手に入れたかは言いません。

不審に思つた若者がこつそり後をつけました。おばあさんはテントの中で着物のすそをめくつて、自分のもを掻かします。するとおばあさんのものもから、とうもろこしの粒がぼろぼろとこぼれ落ちて、床にあふれました。

若者はもう、とうもろこしパンが食べられません。自分が見られたと気づいたおばあさんは、若者を平原に連れて行くと、枯れ草を焼いて、私の髪をつかんで灰の上を引きずり回し、最後に私を燃やさないと命じました。若者は言われたとおりにします。満月を三度経ると、丈高い草の間からのぞく、おばあさんの髪のような毛の下に、とうもろこしが

たくさん実っていました。インディアンはとうもろこしを見ると、おばあさんを思い出し、一粒も無駄にしないで大切にしています。

とうもろこしの黄色い粒が「ももからぼろぼろ」はがれ落ちてくるという、強烈なモチーフにガンとやられて、ほかのところがかすんでしまします。それでも不思議と、食べることに、生きることに、死ぬことに、榮えることの中に、しみじみと入っていける気がして、好きなお話です。

これに似た多くの話では、秘密が暴かれると「見・た・な・あ」となつて、暴いた者がとつて食われてしまう気がしますが、この若者は生き、おばあさんのほうが文字どおり「とつて食われる」とになりしました。しかも、私の髪をつかんで引き回し、私を焼き殺せとは、何ともダイナミックな命令です。私も自分がいつか死ぬことはさすがにもうわかつてはいるつもりですが、「何とかちよつとも苦

しくない方法でよろしく」と常に願っています。おばあさんのこういう命令には、「私とはレベルの違い、崇高な人がいる」と思われます。

おばあさんは自分自身が大事にされるよりも、ともろこしが大事にされることで、人間たちの未来が長く守られていくことを願っていました。こういう人が、本当の女神さまなのでしょう。

●髪に着替え、顔に着替え

子育て中に何度も見た定番の夢の一つに、「もうすぐ卒業式が始まるのに、着ていく服がない」というのがありました。

夢の中で私は今日卒業する学校にいて、在校生は入場を始め、まもなく「卒業生入場」になるのに、私は何だか変な格好で、着るべき服は家に置いてきてしまっています。家に電話するのですが、戻るのが遅いダイヤル式の長い長い電話番号を、あと一個

回せばよいところで、必ず間違えるのです。それにもし電話が通じたとしても、どこにあるどの服なのかを、簡潔に説明できるとは思えません。

あるいは今日は卒業式で、私はそろそろ家を出なくてはいけない時間なのに、まだ部屋着で自分のタンスを引っかき回しながら、着るものがない、着るものがないと、大焦りに焦っています。欠席するしかないのか？ いや、最後だもの、どうしても出たい。では普段着で出るのか？ それは嫌……。パリエーションはいろいろながら、あまりにも頻繁に見る夢で、しかも毎回その焦りが苦しくて仕方がないのでした。

何度かの現実の「卒業」を経て、いままでとは違う何者かにならねばならぬらしい私が味わう、「何を着ていいかわからない」「服がない」「卒業式に出られそうにない」という夢の中の状況は、結構現実と重なっていたかもしれません。なすべき学業

の到達度が低い、この先どういう自分として振る舞えばいいのかわからない、行動様式がまだない、というあたりに、思い当たる節があります。

フェリックス・ホフマンの描くグリム童話『おやゆびこぞう』（大塚勇三訳 ペンギン社 一九七九年 品切れ中）が、両親に最初に作ってもらったのは、黄土色のセーターと、おそろいのニット帽、海老茶の靴下に、空色のつなぎズボン、灰色のブーツでした。かわいいです。

貧しい親を助けるために、自ら売られていったおやゆびこぞうは、見せ物のために人身売買をする二人組の男をだまし、泥棒二人組をやっつけ、のまれた牛の腹とオオカミの腹から抜け出して、無事、親の元に戻りました。長旅の苦勞で、これまでの服がぼろぼろになっていたので、新しい服をまた一そろい作ってもらいました、というところでお話が終わります。

「新品の服でおしまいなの？」と、コケました。今度の服は、れんが色のセーターとズボン、緑の靴下に空色の帽子、茄子紺のかつちりジャケツトに茶色のブーツで、前より少し大人びた感じがします。以前のものが春夏の色合いとすると、今度のは秋冬の色目といえるかもしれません。

でも、こぞうの体は、相変わらず小さいままでした。結婚もしませんでした。それでも時は流れたのです。大きくならないおやゆびこぞうですが、不老不死を授かってはいません。お話を前に進めた分だけ、彼も死に近づきました。朝を始まりとすれば夜に、春を始まりとすれば冬に近づきました。

午後になれば、影は昼前とは違った方向に伸びるし、秋には動物も植物も冬じたくに入ります。中学・高校を卒業したら、それまでの制服はもう着ません。働くようになったら、学生風の服は着なくなりました。ウエディングドレスを着た後の私は、いき

なり「奥さん」で、マタニティドレスを着た後の私は「母」でした。おんぶひもやねんねこの後はベビーカーで、その後はいつも大荷物で、ハイヒールはしまい込んでいました。子どもの手を引かなくなったら荷物は小さくなり、出してきたハイヒールのサイズは合っても、履く気がうせていました。

自分が置かれた状況にふさわしいものを着ることで、それらしくなってきました。とりあえずのコスプレで、「過去に置いてきた私」を、自分にはつきり言い聞かせたのかもしれない。

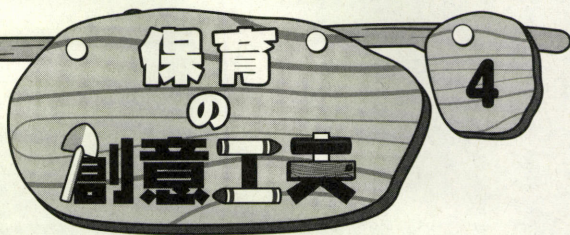
「母」をほとんど卒業した五十代のいまでは、さすがにもう卒業式の服の夢には悩まされません。いまの作業は、毎日順調に老いてゆく自分を、ちゃんと受け入れた、服や髪型を選ぶことです。近ごろ、子どもたちが、私の白髪を気にします。私は簡単にかぶれる体質なので、髪を染める気はないと以前から宣言しているにもかかわらず、「おかあの白髪が増

えた増えた」と、何度も文句（というより、いたわりのつもりなのでしょうけれど、抗議に聞こえる）を言ってきました。

自分では、全体にほやーっとして、三十代の寝起きの顔が常態になってきた五十代の顔に、緑の黒髪の額縁を付けたら、ちぐはぐだと思えます。この顔には白髪混じりのほうが似合って、とってもいいなあとわれながら感心しているのに、子どもたちは嫌みたいです。つまりは、「こら。おかあはそのままでいろー。勝手にずんずん、ばあさんになるな」と言われているのがわかります。

返事は「でも、こうなの」です。こうして何となく、か弱いほうに向かう私を子どもたちに見せておくのもいいかなと思っているところですが。親がダメなほうに進んでいくなら、子どもが自分でしっかりするよりほかに、選択肢がないですものね。

（文筆業）



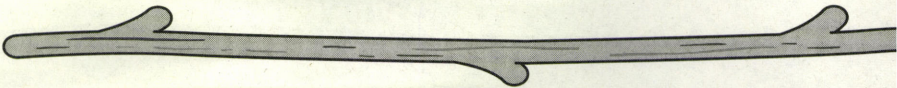
新年度、子どもを迎える園庭環境

前原 寛

四月。新年度の始まりです。保育園の様相も大きく変わります。五歳児が卒業し、新入園児を迎えます。

この時に、私のかかわっている保育園では、園庭環境を大きく変えます。三月に比べると、四月は子どもの年齢が一つ小さくなり、そこに新しい子どもたちが加わります。新入園児はもとより、在園児も保育室やクラス担任が変わり、それまでより少し不安定になる子も見受けられます。子ども一人ひとりが自分の居場所を見出し、落ち着いて過ごせるように、保育者は心掛けます。

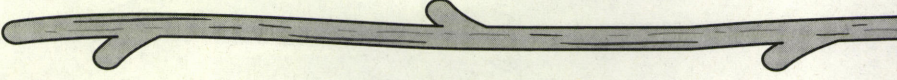
同時に、保育環境も、それにふさわしいものに変わります。壁面装飾など保育室の環境が大きく変わるのは当然ですが、当園では、室内にとどまらず、園




庭環境も変化します。具体的に言うと、大型遊具などの配置を変えることによって、新年度にふさわしい環境を構成するのです。

自分たちは、ずっと以前より大型遊具の移動を行っているのですが、そのことを他園の保育者に話すと、「固定遊具を動かすんですか！」と驚かれます。そう言えば、動かないから固定遊具と呼ばれているわけです。園庭の大型遊具は、いったん配置したら動かさないものだと思います。園庭の大型遊具は、私たちにとっては、園庭の大型遊具は、大型ではあっても固定という認識はありません。必要に応じて移動させるものです。

もちろん、すべての大型遊具が移動式ではありません。たとえば、ぶらんこ、登り棒などは、しっかりと地面に固定されています。そうでなければ危険でしょう。しかし、ジャングルジム、滑り台、鉄棒などは、移動可能です。時期によって園庭での配置が変わります。もちろん危険性がないことを確認した上でのごことです。たとえば、ジャングルジムの大人の力で揺らして倒そうとしてもとても倒せるものではありません。購入する時に実際にやってみました。相撲取りなら倒せるかもしれませんが、それは倒そうとした時の話です。子ども達の通常の活動では、どのようにしても倒れるものではありません。従って、ジャングルジムの固定する必然性はありません。



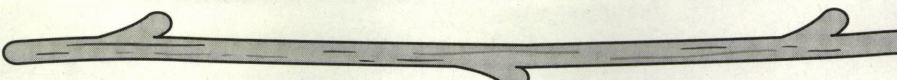


このように、当園では園庭の大型遊具を購入する時（何年に一回しかありませんが）、危険性について充分配慮します。そのかわり、園庭の置き場所に關しては、本当の固定遊具を除いては、さほどこだわりません。置き場所が悪かったとしても、移動させれば済むからです。

こう書くと、当園の保育者は力自慢ばかりのような印象を与えるかもしれませんが、そんなことはありません。大型遊具といえど、最大でも女性の保育者十人程度で移動させることができます。ジャングルジムなどは、最も持ち運びしやすく、五、六人で充分です。

大型遊具を移動させるのは、園庭の環境を「構成―再構成」の視点から考えているからです。子どもの発達する姿は、年間を通じて大きく変わります。それに応じて環境は再構成されていきます。実際、保育室の環境が年間を通じて同じ状態ということは、まずないと思います。それと同様に、園庭の環境も変化させていくのです。季節の移ろいと共に自然の姿は変わっていくのに、園庭の遊具の配置は何年たっても同じまま、というのはおかしくないでしょうか。

また、大型遊具はどうしても場所を取るのです、移動させないという前提に立つと、園庭の周辺に配置される傾向にあります。逆に、園庭の中央部分に固定された場合は、年間を通じて、広いスペースを確保できないこととなります。



このような問題は、遊具の移動によって容易に解決できます。

かといって、大型遊具の移動を頻繁に行うわけではありません。日替わりとか週替わりでもなく、年に数回程度です。言い換えれば、当園の園庭は、年に数種類の表情をもっているということです。

その一つが、新年度です。

園庭は、三月までは子どもの活動が活発になされるように、広い空間が求められますので、遊具は控えめな位置に置かれています。四月は、新入園児の園生活の始まりであると同時に、在園児もクラス替えなどによって少し落ち着かない様子が見られます。そんな時期に、ただ広い空間は子どもの情緒を不安定にさせかねません。むしろ、子どもにとってかわりやすい大型遊具を園庭の中央に移動させることにより、空間の広がりをおさめにし、子どもの活動を生み出しやすくしていきます。あまり空間を狭くし遊具を際立たせると、子どもに圧迫感を与えかねませんので、適度な広がりを保ちながら、しかし、子どもがすぐにかかわれるように配置していきます。

そうして、四月、保育者も保育室も、そして園庭も、子どもたちを迎え入れる環境としての役割を果たしていくのです。

(鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長)



発達心理学者の子育て奮戦記
(10)

赤ちゃん、お姉ちゃん、そしてお母さん

長田瑞恵

きょうだいげんか

わが家の娘は三歳七か月、息子は一歳二か月を過ぎました。娘は何をするにも弟のことを気に掛け、「小さなお母さん」と言わんばかりにかいがいしく弟の世話を焼きたがります。しかし、時にそれが自己主張のはっきりしてきた息子の意思とは反してしまい、小競り合いになることも増えてきました。

息子はおもちゃの電話が大好きで、それを耳に当

てては、「うう、ううー、うう？」などとまるで誰かと話しているかのような声を出して遊びます。すると娘はちよっかいを出し始めます。娘はほかのおもちゃを持ち出し、「H(弟の名前)君、これ貸してあげるよ」と無理に弟に押しつけます。そして、弟の持っていた電話を取り上げ、「これはお姉ちゃんに貸してね」と、ちよっかりしたものです。最初のうちは、姉があてがったおもちゃをおとなしく受け取っていた息子も、しだいに「何だかおかしい」

ということに気づくようになってきました。そして、自分が持っていたおもちゃを取り上げられそうになると、きゅーきゅーと大声を出して抵抗するようになりました。

私はしばらく二人の様子を見ています。すると、二人はきゅーきゅーと奇声を発しながら一つのおもちゃを引つ張り合い、しかも二人共が、ちらちらと私の顔をうかがうのです。

私は、子どもたちがいきなりたたき合いを始めるなど、よほど危険な状態にならない限り、基本的にはきょうだいげんかにはあまり口出ししないことにしています。小さな衝突を経験することが、やがて自分とは違う他者の気持ちや意図を推し量る能力につながっていくと思うからです。その一方で、思いやりのあるかかわり方、不要な衝突を避けるかかわり方の例を周囲の大人が示すことも必要だと考えています。おもちゃの引つ張り合いをしながらこちら

の様子をうかがう二人の顔には、自分に加勢を求め、気持ちだけでなく、「お母さん、こういう時にはどうしたらいいの？」という問いかけが表れているように思えます。

おもちゃの引つ張り合いから押し合いになり、互いに手が出始めるころ、私は娘と息子の双方に声をかけます。どちらか一方だけを我慢させるのではなく、できるだけ二人共が納得しそうな提案をします。

「S（娘の名前）さん、これはH君が先に遊んでいたおもちゃだからね。H君がいやだよーって言ったら、無理には取らないでね。一緒に遊ぼうよって言うてみたら？」

「H君、お姉ちゃんのことたたかかないでね。お姉ちゃんがおもしろいおもちゃ、貸してくれるって。こっちでお姉ちゃんと一緒に遊んでみようか？」

娘も息子も私の声かけに少しほっとしたような様子で、互いの妥協点を探り始めます。たいていは、

娘は息子の持つていたおもちゃがどうしても欲しかったわけではなく、息子のほうも是が非でもそのおもちゃでなければならぬというわけではないのです。

「じゃあ、これと一緒にあーそーぼー！」

娘のかけ声で、二人はまた仲良く遊び始めるのでした。

きょうだいとしての娘と息子のやりとりを見ると、親子のかかわりにはない何かがそこにあるように感じます。娘は息子に対して、自分より小さいものをいたわる優しさをもって接してくれます。一方の息子も、娘のやることには大人のやること以上に注意を向け、経験を共有しようとしています。きょうだいの間には大人との関係の中では経験しないような多くの葛藤が生じます。その一方で、わが家の子どもたちを見ていると、年齢も興味関心も近い存在が身近にあることで、互いに愛着を感じながら、支



え合う関係を築いていっているようにも思えます。遊び疲れて眠ってしまった弟を起ささないように注意しながら、そっとタオルケットを掛けている娘の姿を見ていると、二人の子どもに恵まれた幸せに改めて感謝したいと思うのでした。

心の理論

娘はとてもおしゃべりで、大人顔負けのことを言

うこともよくあります。息子が泣いていると、「H君、〇〇が欲しいんじゃない？」などと弟の気持ちで代弁するようなことを言う時もあります。そのため、娘がまだまだ幼い子どもであるということを私のほうがつい忘れてしまいがちです。娘も大人と同じように他者の気持ちや考えを推し量ることができまわつていよう、私は知らず知らずのうちに期待してしまつていよう、それが原因で娘とぶつかることが増えてきました。

たとえば、娘は時どき、私の呼びかけや問いかけに対して返事をしないことがあります。時には反抗期ゆえの意地を張り、わざと返事をしないです。うです。ただ、毎度毎度反抗して私の声かけを無視しているのかというと、そういうわけでもないらしく、何度か呼びかけると「あれ？ お母さんにはわからなかつたのかな？」といったような表情で答えを返してきます。しかし、何度も娘が返事をしない

ことが重なると、私のほうは「私の問いかけを娘がわざと無視している」という解釈をしがちで、つい、「ちゃんとお返事しなさい」と娘に注意してしまいます。

心理学では、自分や他者の「心」の存在を物の世界とは区別して理解できることを「心の理論」と呼び、その発達について膨大な研究が積み重ねられてきました。心の理論研究でよく用いられる課題に、現実とある人の信念が食い違っていること（誤信念）の理解ができるかどうかを問うものがあります。

たとえば、「Aはチョコレートを緑の棚に入れて出て行った。Aが不在の間にBがやってきて、緑の棚から青の棚にチョコレートを移した。Bが出て行き、Aが戻ってきた」というストーリーを聞かせたうえで、「戻ってきたAは、チョコレートがどこにあると思つているか？」と尋ねます。AはBが自分のいない間にチョコレートを移したことを知りま

せんので、正解はAが最初にチョコレートを入れた「緑の棚」となります。しかし、だいたい四歳くらいより前の子どもたちは、実際にチョコレートが入っているほうの「青の棚」と答えます。これは質問されているAの「誤信念」ではなく「真実」を答えてしまっており、心の中で信じていることと現実との区別がうまくいっていないためと考えられます。

三歳六か月のころ、娘にこの課題を行ってみると、娘は「緑の棚（他者の誤信念）」ではなく「青の棚（真実）」と答えました。他者の信じていることや考えていることは、必ずしも事実そのものとは一致するわけではないということは、幼い娘にはまだまだ理解が難しいようです。そう考えれば、返事をしない時の娘は、「問いかけを無視している」というわけではなく、「自分にとっては言うまでもなくよくわかっていなくても、声に出して返事をしないと母親には伝わらない」ということがよく理解で

きていないだけなのかもしれません。

これからも当分の間、返事をしない娘に何回も何回も「お返事してね、そうしないとお母さん、Sが思っていることがわからないから」と語りかける毎日が続いていくことでしよう。いずれ、娘が他者の心の存在を適切に理解するようになる日まで、辛抱強く待ちたいと思います。

未来への展望

最近、娘には少しずつ時間の概念が育ち始めたようです。「S、前はちっちゃかったねー」などと過去の自分について語ることもあれば、「明日、お買い物に行こうね」と近い未来について話すこともあります。

そのような中で、娘の成長を感じたひと言がありました。

「S、そのうち、大きいお姉ちゃんになるの。それ

で、次は、お母さんになるの」。

以前、娘がもつと小さいころに、「赤ちゃんが欲しい」という娘に、私が「Sはそのうち大きいお姉ちゃんになるの。それからお母さんになるのよ。そうしたら赤ちゃんが来るからね」と教えたことがありました。その時は聞いているだけの娘でしたが、最近になって、自発的に「未来の自分」として話すようになったのでした。

赤ちゃんからお姉ちゃん、そしてお母さんへ。

ついこの間生まれればかりだと思っていた娘も、独立した人格の持ち主として自分の意志で行動するようになりました。時にはその行動が母親である私の予測を超えて、私を戸惑わせることもあるほどです。そして、現在や過去のことだけでなく、未来への展望まで語れるようになったのです。

毎日、就寝前に娘と二人で布団に横になりながら絵本を読み、たあいもないことを話しながら過ごす

短い時間があります。二人で同じ布団をかぶりながら手をつなぎ、娘は日中あったことやおもしろかったことなどをぼつりぼつり話します。慌ただしい毎日を送る中で、私たち親子にとってかけがえのない時間です。そして、私にとっては、娘の命の重みや成長の速さを改めて感じる大切なひとときです。

ともすると、私は忙しさを言い訳にして、娘に対して大人の「当たり前」や期待を押しつけがちです。しかし、就寝前に娘が語る言葉を聞いてみると、いま、この時の娘が生きる世界に寄り添い、娘の言葉や行動の意味を共有しながら過ごしていきたいと思うのです。

いつか、娘が思い描く未来のように、大人になった娘が自分の子どもと過ごす時、母としての私の思いが娘に伝わってくればいいと心から願っています。

(十文字学園女子大学准教授)

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (16)

時空を超えて

北野幸子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ
クション（略称 TeaPot）」にてバックナン
パーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼はじめに

一九九五（平成七）年の春に私は、学部間交流の一貫として、ミネソタ大学に特別研究員として九か月派遣していただく機会に恵まれました。津守真先生やジョン・デューイがおられたミネソタ大学はあこがれの大学です。大学で津守先生にゆかりのある本を見つけ、時空を超えて、保育研究でつながる感動を僭越ながらも抱いたことを今日のことのように思い出します。当時私は、保育者の専門性や保育領域の専門性の確立に専門組織がどのように機能し得るのかに関心があり、ミネソタ大学を拠点として、二十世紀転換期の全米規模の保育専門組織の機関誌や会議資料を収集し学んでいました。渡米中にメモリアルンダ大学や、UCLA、イリノイ大学の書庫を巡りました。一生懸命交涉及して複写不許可の赤い文字の入った原本を特別に印刷してもらって入手することができた時の感動や、国

際幼稚園連盟の大会集合写真に着物をきた日本人を見つけてうれしくなったことなど、いまでも忘れることができません。渡米し資料収集することは、大変困難なことです。初めての英語圏での生活は、留学を目標に学部生時代からアルバイトで資金をこつこつと貯めて、四年越しでやっとかなったことでした。

▼ネット版以前の『幼児の教育』の

資料収集の思い出

このたびネット版『幼児の教育』を見た感想を寄せる機会を頂戴し、私はまず、学生時代に読んだ津守先生の「アメリカ通信」をもう一度読みたいと思いました。私たちは、大学院の幼児教育学実地研究の授業で津守先生の書かれたものを徹底的に集めて読み、保育実践研究とは何か、保育現実をどうやって分析することができているのかを探究しました^註。

当時は、復刻版『幼児の教育』を資料室で閲覧し複

写し、みんなで読んだり、要約したものを発表したり、議論したりしました。

▼キーワード検索をしてみて

ネット版をキーワード「アメリカ」で検索すると、63件ヒットしました。「米国」とすると36件ありました。その中には、大学院時代には気づかなかった論文が幾つかありました。たとえばエピソードや紹介のみならず「アメリカ童話から」のシリーズといった保育内容の記事です。ネット検索の問題として、目的とする論文に即、直接手が届く分、実際に手にとって冊子を見る時と異なり、目次やほかの記事に偶然触れる機会が減り、情報が狭く限られることが指摘されます。しかし、一方で、ネットでは別の種類の偶然の出合いというものもあるのだ、ということを実感しました。続いて著者名「津守」で検索すると13件ありました。「あらっ」と思いました。そんなに少ないはずが

ないからです。続いて目次を順番に開いてみました。すると、目次に共著や編集後記などが掲載されていた。ネット検索にはそういった点を注意する必要がありますかあると思いました。

パソコンを離れ、大学院生時代に収集した資料を探してみることにしました。著書を除いた論文・記事のみで、ボックスファイル三個分のコピーがありました。その半分以上が「幼児の教育」の記事でした。資料の中に、当時の授業で私が発表したレジュメが出てきました。「文献リストと収集作業のご報告」というタイトルです。資料は自分の足でまず大学構内の四つの図書館や資料室で収集し、続いて、広島女子大学、広島女学院大学で収集したとの記録が残っています。当時は多くの図書館をめぐり、たくさんのコピーをしたものです。

しかし、このたび「アメリカ通信1〜8」(「幼児の教育」第五十一巻第六、十、十二号、第五十二巻第

五、八、十一、十二号)の記事検索と印刷に要した時間は十分ちよつとでした。ところが、われながらおもしろいと思つたことは、ふと気づくと一時間半もパソコンの前で、キーワードを変えたり、記事を開いてみると、ネット・サーフィンにずいぶん時間を費やし楽しんでいたことです。

▼「アメリカ通信」を読ませていただいて

久しぶりに「アメリカ通信」を読ませていただきました。「アメリカ通信2」(第五十一巻第十号 一九五二年発行)に「環境というのは恐ろしいもので一つの要素だけ取り出しても、さっぱりピンとこないのである」といった記述があります。さらに「学問研究について」の欄では、アメリカの大学の「日本民族と日本文化」の講義に疑問をもたれたエピソードが紹介されており、これと照らし合わせて、子どもの研究について同様の過ちを私たちが犯していないか、との警告が

なされています。そして、研究における謙虚さの大切さが述べられています。

読みながら私は、背筋がピンと伸びる思いがしました。この記事を最初に読んだ時に、アメリカで感じた日本に対するステレオタイプのイメージへの大きな疑問と、その時の経験が重ね合わされたことを思い出します。改めて、自分の行っている海外の保育にかかわる研究に、常にこの危険があることをしっかりと意識せねばならないと思いました。

「アメリカ通信」には、平和へのメッセージと人権を考えるメッセージが数多く埋め込まれています。十二年前に初めて読んだ時の感動とメッセージが、時空を超えて再び私に響いてきました。東南アジアの人たちとの人間と人間とのつながりの中で理解を深め、尊敬していく必要についても指摘されています。アメリカのみならず北欧、ヨーロッパの人々との関係や人種問題などの課題も指摘されています。「アメリカ通信3」

(第五十一巻第十一号 一九五二年発行)では、文末に「一体、何をしたらいいのだろうか」とつぶられています。これはご自身へ投げかけられた問いでありながら、私たち読者へのメッセージであるとも思います。

私自身、大学院時代この記事に触れ、「では、自分は何ができるのか?」を問われ宿題を課され、また同時にエールを送っていただいたように感じて読んだことを思い出します。

今日、保育の分野の国際交流が年々進み、保育の重要性を共に社会に伝え、子どもたちの保育の環境を改善し、またその質の向上を図る試みが国境を越えて行われています。普遍的な保育のあり方を探究し、共にその推進を図るグローバル・ガバナンスは望ましい保育の根拠を探究し、それが各国・地域・文化の中でそれぞれのかたちで実践されるよう推奨するものであり、両者が相反するものではないと私は思います。大学内や国内で保育学を専門とする同僚が少ない孤独を

感じることがあります。そんな時、過去の保育研究者の歩みに触れ、他国の保育研究仲間と交流することにより励まされることが多々あります。

ネット版『幼児の教育』は、保育者や保育研究者を時空を超えてつなく媒体となるに違いありません。二〇一一（平成二十三）年夏に、神戸で環太平洋乳幼児教育学会を開催します。アジア、そして世界の保育者との交流を進めるために、自分にできる一つの課題と思います、研鑽を積む覚悟を新たにしました。

▼経済性と資料アクセスの利便性について

このたび『幼児の教育』がネット公開されて、私は何よりも、研究にかかる経済的なバイヤスの軽減につながることに資料アクセスの利便性が高まることが素晴らしいと思いました。

学生時代、自分は紙の収集のためにアルバイトをしているなあ、という気持ちになったことを思い出しま

す。高校生の時の私は、幼児教育こそが大切だと思いい、「幼稚園の先生になろうかな」「行政職について保育の充実を図る政策を考えようかな」「研究者になって保育者を養成しようかな」などと大きな夢を膨らませて、神戸大学教育学部幼児教育科に進学しました。大学では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の免許を取得し、やはり、幼児期の教育こそが奥が深く大切だと思えました。特に、主体的な「好きな遊び」が大切で、その時々に必要な学びがあり、さらに後の学びの基礎となる、このことをどうやって跡づければいいのか、その重要性に関する社会的認識をいかに広めることができるのかと、悩みました。

卒業論文ではデューイの幼児教育論を研究しました。学部の図書館の書庫には南イリノイ大学から出版されているデューイの全集があり、その索引を調べ、幼児教育、幼稚園という語がある論文を片端から読みました。しかしこれは、身近に全集があり、それを順

番に読むことができたからです。広島大学大学院の幼児学専攻に進学し、博士課程前期にはアメリカの幼児教育における児童研究運動の展開、後期課程以降はアメリカの全米規模の専門組織について、一次資料を一生懸命集めて、答えを求め、しかし得られず悩みながら読みました。全米教育協会の古い資料を集めに広島から車で名古屋大学に出かけていったこともありま
す。むろん、莫大なコピーの山は私の大切な財産でもあります。転職にあたり、研究室分だけで四トントラックの荷物となりました。

資料収集にかかる経済的負担が小さくなることや資料へのアクセスが容易になることと、資料に対峙する姿勢や先行研究や先輩研究者への尊敬や研究者モラルの維持とは、分けて考えるべきであると思えます。それは保育の提供体制を整備すること、その中で児童の最善の利益を保証するために活用方法を工夫し、倫理的な配慮を行うこととを分けて考えるべきで

あることに類似するようにも思います。たとえば「休日保育事業」を行うことと、その利用の条件を考慮することとを分けて考えねばならないということです。

学生時代に、恩師の鳥光美緒子先生の厳しく真摯な姿勢から徹底的に資料にあたることの大切さを学びました。『幼児の教育』の記事からも間接的に、研究者の姿勢から多くを考えさせられ、課題を与えられたように思います。ネット公開によって、研究の利便性が高まること、このことが、時空を超えて日本の保育の歴史といまを伝え、先人から学び、世界の保育界の仲間とつながる、大きな牽引けんいんになるといふ喜びを感じます。よって、その益々の発展を心より願う次第です。

(神戸大学大学院准教授)

注 鳥光美緒子・北野幸子・山内紀幸・中坪史典・小山優子著

「保育現実の分析のための方法論的検討―津守真における転回をめぐって―」『幼年教育研究年報』第21巻

一九九九年三月

ひととき

第4回



子どもたちの心に 小さな種(まめ)を

まめの木プロジェクト

自然や環境へのまなざしを
育むために

子どもたちの周りにはモノがあふれています。高機能なおもちゃやゲームなど、いつときは夢中になっても、新しいモノが手に入れば見向きもしなくなってしまうこともあります。そして、いらなくなったら捨ててしまおう、という風潮は私たち大人の世界にも蔓延しています。

一方で、お母さんやお父さんが使っていたおもちゃ、とりわけ木のおもちゃや手押し車で、子どもたちが楽しそうに遊んでいる光景を目にします。木がもつぬくもりが世代をつなぎ、モノを大切に作る気持ちや愛着を生み出すのかもしれない。

そこで私たちは、子どもたちが実際に木に触れ、木の良さを心と身体で感じ、そして何よりも楽しむことで、木への親しみ、木の良さを知ることになると考えました。木に関連したさまざまな遊びを提案し、必要とされる所へ出向いて行って提供しています。集めた木のおもちゃなどはすべて、日本生まれの安全・安心なものばかりです。



〈プロジェクト紹介〉 自然に触れる機会の少ない都会の子どもたちを対象に、遊びながら木に触れたり、木でモノを創る活動などの「木育」を通じて、子どもたちの「おもしろい！ 不思議？ できた！ もっと知りたい！ いいとおしい……」といった心を育み、自然への興味を引き出すことを目的として、幼稚園や保育園、児童館、小学校などで活動を展開するプロジェクトです。まめの木プロジェクトブログ http://blogs.yahoo.co.jp/mamenoki_project
まめの木プロジェクト連絡先（代表波辺萌子）
mamepro.watanabe@gmail.com

具体的な活動プログラム

子どもたちは、私たち大人がもっている固定観念にとられず、自由にのびのびと遊びます。一人で遊んだりお友達と協力して何かを作りあげたり……。見守っているつもりが、気がつくとも大人も夢中になって遊んでいたり……。親子や先生と子どもたちが一緒に楽しめるのも大きな魅力です。このプロジェクトが子どもたちがいずれ大きくなった時に、自分たちをとりまく世界、自然や環境に向けられる豊かな心を育むきっかけになればと願っています。

ひのきのリボンのプール（p.50写真参照）

ふわふわのかんなくずがプールにあるだけ。体に巻きつけるもよし、潜って遊ぶもよし、子どもたちが全身を思いきり使って自由に遊べます。丸めてボールにしたり、リースにしたりもできます。

木のおもちや（p.51写真参照）

木の自然の色がきれい、見た目にも楽しいおもちゃです。不思議な形と色をしたパーツを穴に入れたり、たたいて音を楽しんだり、木がもつ柔らかな触覚が気持ちよいです。杉材を使ったドミノなどもあります。



写真提供

お茶の水女子大学附属いずみナーサリィ

保育の現場から

保育の中の親支援

～乳幼児精神保健の領野から保育を考える～

前野當子

谷本恭子



気になる子どもへの支援の道すじは

親支援から

前野當子

昨年五月に開催された日本保育学会第62回大会プログラムの中に、『乳幼児精神保健と保育学』と題する自主シンポジウムがありました。^注冒頭、企画者から、子ども心の健康を支えようとする乳幼児精神保健の見地から、保育の中に見出しうる諸問題についての討論を深めたいという趣旨説明がありました。

本稿は、話題提供者のうちの二人によるもので、同じ地域で連携しつつ、子どもを受け止めることのできる親に育ってほしいという願いをもって、子どもたちとの毎日をていねいに過ごしている実践者です。

従来、保育園は子どもたちの成長を年齢発達を基にして保育をしてきました。その時、気になる子ども姿の原因は、育ちの中の生活経験の弱さにとらえ、援助や指導をていねいにしていくことで多くの行動は解決できてきたと思っていました。

しかし、現在、多くの気になる子どもたちの行動は

単に、経験不足が子どもたちの心身の成長を妨げているという視点で見るとはならず、守られるべき乳幼児時代の親子関係に問題があり、信頼や安心できるかわりが不十分であるために、心理的な問題を混乱した行動として表して、信号を送っているのだと思えるのです。

子どもの信号は、抱いても身体が人に添えない、少しのことでキレル、攻撃的な暴言暴力、身体に触られることを嫌う、語りかけの言葉が響いていかないなど、さまざまです。子ども本来の明るさ、柔らかさ、愛らしさなどでなく、とがっていて激しく、不安定な危なっかしい症状を出すことで子どもたちは心の状態を保育士にぶつけてきます。

子どもの心の叫びは、私を、僕をかまっけてほしいという、幼く基本的な人とのつながりを求めている表現です。家庭でもって行きようのない反発と、切り替えのできない葛藤など、心のガスを保育園という場で吐き出してバランスをとっているように思います。

これらの混乱した行動の原因は、どこまでも子ども自身がつくったものではなく、親にあるということだと思います。しかし、親もさまざまな理由で混乱や余裕の無い気持ちのため、受け止めることができず、子どもの行動に対する理解が困難になっています。なぜ、親の言っていることが理解できないのか、なぜ、甘えてまとわりつくのかなど、子どもの心の叫びが理解できず、混乱した親の心はさらに、イライラした状態になります。そして、時には、目に見えた行動へのしつけのみでこのような心の荒れが収まるのだと思ひ、指導的、威圧的、また、無視した態度などで子どもに差し向かい、どこまでも子どもの心は満足されずに、厳しい状況に置かれてしまう事例を多く見てきました。また時には、精神的な問題や発達障害などを疑い、子どもに要因を押し付ける相談もあります。まずまず子どもは甘えることができず、安心し安定した親子の心の関係づくりがさらに未発達に置き去りにされて育っていき、心の反った行為で表現をしてくること

につながるのです。

この子育ての混乱はどの家庭にも程度の差はあれど、さまざまな状態で年々増加し、深刻な状態になっています。親の思いが先行し、子どもの思いをどこかに置き去りにして膨らんでいき過ぎ、うまく親子が組み合わないことで混乱の状態が厳しくなってしまうように思います。大人側の抱えたさまざまな理由や事情があった子育ての中では、誰もが混乱に陥る要素がある、その混乱は子どもの荒れとなって私たちに訴えているのだと思います。

いま、親子と毎日出会う保育園において、親子支援のあり方を考えさせられます。心のしんどさを吐き出し、甘えを受け止められ、安心と信頼がもてる場所であることが最も必要とされているのではないかと考えます。いま保育士は、子どもと向き合う時、子どもの表してくる行動は何を語っているのか共感しながら心の発達年齢を理解することが重要で、その目線まで下がった対応をすることによって子どもの心の育て直し

に近づくことができると思います。

また、いま親をどのように理解していくかということも大切です。一見問題点など表面上見えない保護者が、子育ての混乱を抱えている状態が最近増えているように思います。それだけ人とのつながり、関係の中で弱音を見せられない、また、相談することで傷つくことを恐れているなど、親もまた自分の生育歴の中で、つまずきをもっていたりします。親子の関係は一对であり、親の混乱は子の混乱であるという視点から、親を支えることで親のストレスのガス抜きができれば、親もまた子と向かい合う心の余裕が生まれるのではないかと思います。取り組んできました。思い悩みの状態を抱えている人ほど慎重であり、心の響き合いにいたる関係づくりに時間がかかります。

なかなか心の扉が開かない親に、薄皮をはぐように相手の懐に踏み入れさせてもらえる関係づくりは、特別なことではなく、日常の何気ない会話であり、雑談から始まることを実感してきました。さまざまな問題

も親との継続的な出会いの中から私たちが学ぶべきです。親だから子どものことを考えていくべきだという保育の方法では、単純な問答形式や説教で終わり一方的なかわりになりがちです。

母子への要求などを話すのではなく、毎日の出会いを大切に、「いってらっしゃい」など、笑顔でのあいさつと雑談の継続が相互の心の距離を少しずつ近くし、こちらが予想もしない相談を親から受けることもありえます。また、毎日の出会いの中でいつもと微妙に違う親子の姿に出会うと、何かあったのではと感じさせてくれ、気付きの感性を養ってくれました。それは親子の関係性障害になりうる混乱を鎮めるかわりがあり、虐待予防になる支え合いを私たちができるということです。自分の心にならずき、語る時間を一緒にもつてくれる人がいることで、母親は心の重荷のガスを抜くことができ、何かが変わっていくということです。

(高知市子ども家庭支援センター)

子ども家庭相談員)

高知聖園ベビーホームの養育と親支援

谷本恭子

乳児院「高知聖園ベビーホーム」では、〇〜三歳の子どもたち30名が養育困難や養育拒否、経済困難、虐待などの理由で親や家族と離れて生活をしています。

乳児院の役割として、親に代わる愛情を子どもたちに育み伝えることや傷ついた身体や心を癒すことがあります。そのため次の方法をとっています。

①養育担当制をとり、子どもとの間に親に代わる特別な愛着関係を築く。

②集団養育で個が埋没しないように、自ら欲求がいつばい出せる子どもに育てる。

③家庭に代わる役割を担うために、抱っこやおんぶ、一緒に入浴、添い寝などを行う。

これらを通して、子ども自身が愛されていると感じることのできるかわりを目指して養育しています。職員のかかわりが子どもたちに伝えられ、子どもたち

は自分の受けたかわかりを他者に向けていきます。どんな育て方をされてきたのが問われます。良き世代間伝達が次の世代に受け継がれていくようにしたいと思います。

親子関係の構築や再統合のためには、親支援が重要な鍵となります。子どもへの接し方がわからない、子どもをかわいいと思えない、虐待してしまうなどさまざまな状態の親がいます。その親たちは自分自身の生い立ちの中のトラウマや現在の生活に困難を抱えています。甘えられなかった子ども時代、虐待体験、いじめられ体験、差別感、孤独感、さまざまな人間関係の悩み、経済問題、さまざまなことが語られます。親や家族をできるだけ温かく迎え入れ、話を繰り返し聴いていきます。そしてトラウマ解決の糸口を見つけ、共感の中でトラウマを和らげていきます。

《事例、この子をかわいいと思えない》

疲れ切った表情の未婚のお母さんが、生後二か月の

赤ちゃんを連れて「少しの間、預かってほしい」と乳児院にやって来ました。緊張が強く抱きにくい、視線の合わない、よく泣く赤ちゃんでした。お母さんは「この子をかわいいと思えない。この子の顔が妊娠中に私を捨てた子どもの父親にそっくりだ」と……。この子を一人で育て、周りから『お母さんなのだから頑張らない』と言われてすごくしんどかった。もう頑張れない」「この子の父親は結婚しようと言ってくれ、妊娠したことを伝えた時、産んでほしいと言ってくれた。うれしかった。でも妊娠七か月の時、私の前から姿を消して、突然いなくなってしまった」「私は小学生の時、妹と一緒に養護施設に預けられていた。毎日、毎日、お母さんの迎えを待っていた。でも、お母さんは来てくれなかった。寂しかった。お母さんはアルコール依存症で自分や妹は怒鳴られたり、たたかれたり、風呂に顔をつけられたりと虐待を受けていた。それでもお母さんと一緒に暮らしたかった」。

そのお母さんはいろいろな心情を吐露してくれ赤

ちゃんは乳児院で預かることになりました。乳児院の職員が赤ちゃんを受け入れ、子宮の中に居た時のように丸くなる抱っこ、目を見つめての話しかけなど、ゆったりとしたかわりを続けました。預かって一か月が過ぎるころには、職員と目が合い、笑顔が見られ、緊張が解けて柔らかく抱っこされるようになりました。

ニコニコ笑う赤ちゃんを見て、お母さんから「なんだか顔が変わったみたい」という言葉が聞かれました。「お母さんに似て、かわいいね」と伝えると、はにかみながらほほ笑んで、「かわいい！」と言って赤ちゃんを抱き上げました。親子関係の再構築のスタートがこうして始まったのです。乳児院に預けた後、「この子に寂しい思いをさせたくない、夜中に目が覚めた時に私がそばに居てやりたい」と仕事帰りの遅い時間に迎えに来て、早朝、仕事に行く前に預けに来る日が多々ありました。子育てに悩むことも多く、「自分ばかり育てられてこなかったから、どう育てて

いいかわからない」と訴えることもあり、その都度、職員に相談しながら育児に向き合ってきました。子どもを一人前に育てるためにと専門学校にも通い、いまは資格を取って収入の安定した仕事にも就いています。「この子が私の生きがいです」というお母さんの言葉が聞かれるようになりました。

もし、このお母さんがトラウマを抱え、かわいいと思えないまま子育てを続けていたとしたら、親子の関係はどうなっていたでしょう？ 虐待が起こっていたかもしれません。お母さんは繰り返し語り、共感される中で受容され、徐々にわが子に向き合い始めました。生まれてきた子とお母さんの出会いを援助することで、親子の絆を紡いでいけると思わせてくれた事例です。 (高知聖園ベビーホーム)

注 自主シンポジウム『乳児精神保健と保育学』

話題提供者：澤田敬(高知県立中央児童相談所) 谷本恭子(高知聖園ベビーホーム) 前野當子(元高知市立秦中央保育園) 佐藤恵美子(大妻女子大学短期大学部)
指定討論者：柴崎正行(大妻女子大学)
企画・司会：DARLYNMPLE 規子(中部学院大学)

幼保の連携に向けて

― 移行期としての二歳児保育 ―

塩崎美穂

二歳児のいるといる

私たちの「幼保プロジェクト」では、「〇〜五歳の発達を見通した保育カリキュラム研究」の一部として、「二歳児の発達と学び」について研究してきました。^{注1}

ここでいう「二歳児」とは、年度中に満三歳になる子どもを指しますが、日本の保育制度はこの子どもたちに、保育所の二歳児クラス、家庭的保育、幼稚園の未就園児クラスなど、複数の保育の場を用意しています。

こうした保育の場は、これまで、子育て家族の多様

さに対応し運営されてきました。しかし近年では、子育て中も専門的キャリアを継続する母親の漸増に加え、産業構造の変容に伴い労働形態の非正規雇用化が進んでいることから、不安定な就労を保障する保育の場がより多く求められるようになっていきます。特に都市部では、保育所入所希望者数が定員数を上回ることで常態であり、中でも乳児保育と呼ばれる〇〜二歳児の保育の場が不足していることは周知の通りです。

たとえば、平成十八年度の二歳児の総人口約109万人のうち、保育所に在籍する二歳児は約30万人強。つま

り、約三人に一人の二歳児が保育所に通っていることになりませんが、これに、専業主婦層の就業希望や社会的孤立を背景とした育児不安対応といった潜在的な保育要求を加えると、現在は、より多くの二歳児が、保育所で行われているような形態の保育を求めていると考えられます。

幼保の連携に向けて

— 認定こども園の意味

厚生労働省と文部科学省は、両省の連携を進めるための「幼保連携推進室」を設置し、本プロジェクトが開始された二〇〇六（平成十八）年の十月には、これまでの保育制度を越えた新しい仕組みである保育所と幼稚園の一体型施設「認定こども園」をスタートさせました。^{注2} 認定こども園は、すべての子育て家庭を対象とした保育施設であり、親の就労の有無によらず保育が保障される制度整備の第一歩と考えられます。とりわけ、一日の多くの時間を家庭内で母親だけと過ごし

ている〇〜二歳の子どもたちへの保育保障が、施策の念頭に置かれていることは間違いないでしょう。

いま、国の保育政策としても、幼保のつながりや三歳未満児の保育に関する研究が必要なことは明らかであり、特に、幼稚園の定員割れが各地で問題となる中、幼稚園の今後のあり方には注目が集まっています。「預かり保育」という補足的な形態によってではなく、これからは、必要な場合には保護者の就労保障を含めて子どもの生活を支えることや、幼稚園の教育課程内に三歳未満児の保育を創造していくことなどが、不可避になってくるのではないのでしょうか。

幼稚園における年齢規定

幼保の連携のためには、制度的違いとして明らかな幼稚園の入園年齢や保育時間の規定についての検討が必要でしょう。ここでは入園年齢についての歴史を振り返ってみようと思います。〇歳から入園可能な保育所に対し、幼稚園は三歳児就園が慣例化しています。

しかし創設時には、「満二年以上ノモノ」、つまりここのでいう「二歳児」からの入園が可能でした。一八七六（明治九年、東京女子師範学校内に幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）が設置された際に出された日本初の幼稚園規則には、次のような条項があります。

「第二條 小児ハ男女ヲ論セス年齢満三年以上満六年以下トス 但シ時宜ニ由リ満二年以上ノモノハ入園ヲ許シ又満六年以上ニ出ツルモノト雖モ猶在園セシムルコトアルヘシ」^註

満四歳になる学年の子どもを「三歳児」とし、その年齢からの幼稚園入園を許可する現在に続く慣例とは異なり、満三歳、つまり「二歳児」後半からの入園が考えられています。ご存じのように、この規定が現在の学校教育法にも受け継がれ、未就園児クラスの運営も可能にしています。しかもこの時には、場合によっては、満二歳という保育所の「一歳児」クラスの後半

から「二歳児」クラスの前半に相当する年齢の子どもにさえも、入園が許されていました。

幼稚園令における年齢規定

— 三歳未満児も —

幼稚園規則ができて、ちょうど五十年後の一九二六（大正十五年）年、日本初の保育における単独法である「幼稚園令」が出されました。幼稚園令における年齢規定は、「特別ノ事情アル場合ニ於テハ三歳未満ノ幼児ヲモ入園セシメ得ル」^註となっており、この時には、三歳未満児の保育も幼稚園において認められています。

幼稚園史上において入園年齢とは、「時宜」や「事情」によって臨機応変に斟酌^{しんさく}される事柄だったと考えられます。おそらく、三歳未満の子どもが保育の場に居合わせる実態もあったのでしよう。

しかもこの幼稚園令は、入園年齢に幅をもたせたのみならず、それまでの保育時間規定を削除し、幼稚園でも長く保育ができるようにしています。それは、当

時必要とされていた「託児所」的保育機能を、幼稚園制度に盛り込んだものでした。いまから八十年も前の幼稚園令においてすでに、二歳児を含む三歳未満児の保育保障が幼稚園に求められ、それが法制化さえされていたということは、改めて確認される必要があるように思います。

しかし、後世から見ても残念だった点は、幼稚園令には、その理念を支える財政的基盤が用意されなかったことでしょう。財源が確保されなかったために、幼稚園令の理念的先見性は生かされず、三歳未満児の保育が幼稚園で広く実践されることはついありませんでした。

戦後、幼稚園の法的基盤は、一九四七(昭和二十二)年制定の学校教育法となり、そこでは、幼稚園令にあった三歳未満児の入園許可が取り除かれ、入園は「満三歳から、小学校就学の始期に達するまで」にのみ認められ、これが現在に続く年齢規定となっています。

保育制度を時代に即したものにしようとするのであ

れば、幼稚園の入園年齢の意味については、再考してみるのは必要はないでしょうか。それは、年齢規定に関する制度史を見る限り、幼稚園入園は三歳以上でなくてはならないという明確な理由が、私たちの中に合意されているわけではないと思われるからです。

幼保連携の制度的困難と実践的可能性

鳥光美緒子氏による先行研究^{註5}の確に指摘されているように、三〜五歳児という同年齢の子どもが「保育に欠ける」か「欠けない」かに応じて、保育所と幼稚園という別個の施設に所属する日本の二元的保育制度は、世界にもまれなシステムです。たとえばEU諸国でも養護と教育の制度的統合は保育政策の課題になっていますが、日本のように同年齢の子どもが管轄省庁の異なる保育施設にいることはありません。

本来、同じように保育を保障されるべき同年齢の子どもを別々に引き受けている保育士と幼稚園教諭にとつて、制度を越えて、保育者同士として連携するだ

けでも難しいことであり、さらに、実践の足場である保育制度の変革を視野に入れた連携など、目の前にある自分の保育実践の基盤を失いかねない難しさがあるものでしょう。

しかし、一方において、日本の保育所の法的整備が戦前に比して格段に進捗しんぱくしたことによって、三歳未満児を含む公私の保育所の保育実践は豊かになりましたが、他方において義務教育ではなく学校教育に位置づけられた幼稚園は、私立に依存してきた経緯と私立幼稚園に対する国家的補助の不備もあり財政的困難を常に抱えています。幼と保では、保育者の労働条件や保護者の経済的負担に、小さくない差が生じていることも事実です。幼保のこうした差については是正されていく必要があるでしょうし、特に私立幼稚園については、財政的基盤を確保した上で、時代に対応した保育資源としての再生を考える必要があるでしょう。制度改革を含めた幼保の連携が待たれています。

ここでは連携のための糸口として、二歳児の保育実

践に注目し、幼保の保育実践の重なりから、幼保連携の可能性を示したいと思います。三〜五歳のようにはっきりと幼保に二元化される年齢ではなく、しかし実践においては、保育所での保育実践の蓄積があり、幼稚園に通うこともある二歳児について、幼保で一緒に考える機会をもつことが、連携につながるように思われます。

これまでの日本の保育実践における二歳児保育は、保育所保育においては、乳児期から幼児期への移行期に位置付けられ、幼稚園保育では、教育課程内には含まれないものの、未就園児として家庭から園生活へと移行する時期の姿としてとらえられています。二歳児保育の特徴は「移行」にあるのではないのでしょうか。

乳児期から幼児期への移行

— 適応と変革 —

最後に、精神発達の研究から二歳児の姿を確認し、幼保連携に必要な視点を留意したいと思います。

久保田正人氏は、二歳児（久保田は二歳半と表記）

を、「自分や他人の行為の責任ということがわかつて
いるような、問責の行動^{注6}」をする時期だとしていま
す。母親一人では二歳児が育てにくいのは、世界に責
任をもつ存在として登場してくる（移行してくる）二
歳児が、基本的生活習慣の獲得のような社会への適応
だけではなく、大人にはいたずらとして認識されるよ
うな、しかしその行為が社会の中に定着している意味
を変革する可能性をもつ行動をする^{注7}からだと考えられ
ます。学校を模した幼稚園では二歳半より前の年齢の
就園は難しいとするザゾの先行研究^{注8}も踏まえ、学校的
ではない保育の場を、「問責」を始める二歳児と共に
確保していくことが、保育への財源調達も含め、今後
の課題ではないでしょうか。適応するだけではなく、
生活や人間関係を変革しようとする二歳児の姿には、
硬直した幼保の二元的制度を乗り越えていく姿が隠さ
れているように思います。

（お茶の水女子大学幼保プロジェクト）

注

- 1 江波諄子「二歳児の発達と学び（その1）自分・大人・友達とのかかわりの特徴と保育者の援助」
大戸美也子・柴坂寿子・狩野理恵・佐藤嘉代子・武居裕子「二歳児の発達と学び（その2）排泄行為の自立形成における支援の指標を探る」
- 2 日本保育学会第60回大会論文集 二〇〇七年 p. 682～685
「幼保連携推進室」については以下のHP参照。
<http://www.youho.go.jp/index.html>
- 3 『東京女子師範学校六十年史』一九三四年 p. 310
浦辺史・宍戸健夫・村山祐一編『保育の歴史』青木書店
一九八一年 p. 75
- 5 鳥光美緒子「戦後保育・幼児教育政策の歩みを見なおす
―幼保二元行政システムのもたらしたもの―」森田尚人・森田伸子・今井康雄編『教育と政治』勁草書房
二〇〇三年 p. 115～141
- 6 久保田正人の引用はすべて、久保田正人『二歳半という年齢』新曜社 一九九三年 p. 196～197から
- 7 松村康平・板垣葉子『適応と変革』誠信書房
一九六〇年
- 8 ザゾ (Zazzo, Banka) 久保田正人・高橋洋代・足立自朗
訳『二歳児の幼稚園教育は是か非か』大月書店
一九八九年

編集後記

倉橋惣三の文章はよく、保育現場の近くにいる者の心に格別に響くと言われる。子どもと生活を共にする人が伝えようとしてなかなか言葉にできないこと、あるいは語られて初めて「ああ、そういえば」と腑に落ちるようなことを、倉橋は軽妙な独特の語り口で論じる。今回の特集テーマ「生活を生活で生活へ」では生活という言葉が3回くり返され、まさに「呪文」のようだ。その奥の意味を判ずるうちに「なるほどな」と納得させられるような力がある。

今月から始まる秋田喜代美先生の連載タイトルは「園のくらしを育む」。「くらし」と「生活」一似ているけれどどう違うのだろう、などということを考えながら読みたいと思う。今年の4月は、倉橋の没後55年にあたる。

(H)

幼児の教育 第109巻 第4号

平成22年 4月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集担当 金子めぐみ
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円 (本体524円)
©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館
表紙絵 後宮ひろみ
扉題字 津守 眞
本文カット 田崎トシ子
編集スタッフ 高橋陽子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

〈特集〉いま、倉橋と出会う 5 「驚く心」

若月和子・塩崎美穂

●インタビュー5 ● 村田修子 (聞き手/浜口順子・佐治由美子)

・保育の創意工夫 (5) 前原 寛

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開が始まりました！
お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション”TeaPot”
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定です。
ご意見ご感想などは、yujimail@yahoo.co.jpまでお寄せ下さい。

毎日の保育をより楽しく演出!

楽しく保育室を飾るために

春夏秋冬、季節ごと、年間を通して
使えるアイデア満載

誕生表&壁面アイデア

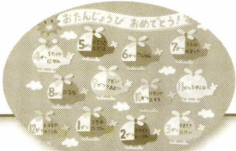
あかま あきこ、いしかわまりこ、いわいごこ まゆ、
大橋文男、尾田芳子、小沼かおる、島田明美/著

バリエーション豊かな誕生表と、季節の行事に応じた壁面を紹介。かんたん型紙と工作テクニック集で、製作もラクラク。

26×21cm 96ページ 定価 1,890円(税込)



10915



0・1・2歳のおそびと環境



10916

五感を育てる環境作りに

身近にある素材を利用して手作りする、あたたかな環境

0・1・2歳のおそびと環境

寺西恵里子/デザイン

乳児の環境に必要なあたたかい雰囲気作りを応援! 簡単にできる手作りおもちゃや室内装飾を紹介。

26×21cm 96ページ 定価 1,890円(税込)



好評発売中

『幼児の教育』の連載企画本

倉橋惣三も編集主幹を務めた『幼児の教育』が、2010年に創刊より109年を迎えた。その中から、連載内容をまとめた企画本もさまざま発刊され続け好評を得ている。

津守との対話から
保育の原点を知る!

新しく生きる

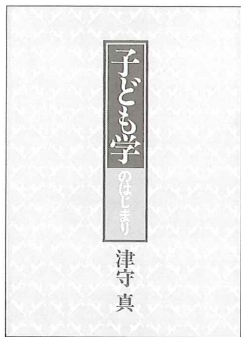
— 津守 真と保育を語る —

津守 真・浜口順子 / 編著

『幼児の教育』に連載された津守の論考を受け止め、7名の研究者・保育者たちがそれぞれの子ども・保育理解を浮き彫りにし、津守との対話を試みる。いまなお“新しく生きる”津守の姿から、保育の原点を知る。

21×15cm 230ページ 定価 2,100円(税込)

2009年12月刊行
10745



子ども学のはじまり

津守 真 / 著

子ども学の決定版!
20刷 好評発売中!

子どもの行動の見方と研究法について、著者が長年考えてきたことを論述。保育の原点を示唆し、人間学的保育学のスタート地点を示す。

19×13cm 296ページ 定価 2,100円(税込)

15600

1979年1月初版



保育の中の 小さなこと大切なこと

守永英子・保育を考える会 / 著

日々の保育には、見過ごしてしまうような“小さなこと”の中に、大切なこと”が隠れている。それらを拾い上げて、その意味を知る。

21×15cm 224ページ 定価 1,890円(税込)

2001年4月初版

36400



子ども100年の エポック

「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで -
本田和子 / 著

20世紀、この100年の「子ども観」「子ども-大人関係」の変遷を跡付け、21世紀の「子ども」の新たな可能性を展望する。

20×14cm 280ページ 定価 2,100円(税込)

2000年4月初版

35700

キダーブックの

フレーベル館

定価 五五〇円(本体五二四円)☆

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。